

それぞれの回、あがんとくがんとふーけた話…
各回生の幹事の方に同窓の現状、活動模様などを報告していただきました。

むかし私も『オウム』だった

私が小学校に入学した年の夏、七月七日に支那事変（日中戦争）がはじまり、中学三年の夏、八月十五日に大東亜戦争が終わった。その間、私は日本は神国であり、天皇陛下は神様であると、修身の時間で教わり、ジンム、スイゼイと、天皇一二四代の名も、明治二年発布された難しい漢字の並ぶ教育勅語も、小学校低学年の頃に暗誦させられ、中学校では三十分はかかる長い長い『軍人勅諭』を覚えさせられた。

を繰り返しませんという国の謝罪の象徴が新憲法の誕生であり、学制改革、即ち北高の創立だった、と思います。創立以来半世紀、果たして我々が描いていた世の中に発展してきたのだろうか。二十一世紀を次世代に託すにしろ、政治、経済、文化、あらゆる面で、未解決のまま先送りされた問題を未精算のまま託す訳にはいかないのではないか。都合の悪い不愉快な過去を抹殺するのではなく、きちんと清算して託さなければ、次の世代が困るだろう。

かつて私たちが困ったように。
蓮尾 豊



カット／高祖一幸（4回生）

発足時の北高

長崎県立佐世保北高等学校が、アメリカ占領軍による教育改革の一環として発足したのは、昭和二十四年一月の事である。

当時佐世保には、旧制の公立中学、高等女学校は、昭和二十三年三月に新制高等学校に移行していた。旧制の男子中学校は五年、高等女学校は四年で卒業する事になっていた。新制高等学校に組織替えされたことよって、男子中学校の場合は一年、女子の高等女学校の場合は二年間卒業が延長されることになった。

名称は高等学校に変わっても校舎、教員、生徒共に従来のままだった。当時アメリカ占領軍長崎軍政部の教育官であったニプロ氏の指導により、新制高校の統廃合がなされ、男女共学が実施されたのである。ニプロ氏はアメリカで体育教師であったとのこと、占領直後に長崎県下各学校を廻り、アメリカ民主主義について講演、フォークダングスの普及に努めていた。

されると賛否両論が起きたが、占領軍の強力な教育政策によって、新学年を待つことなく実施された。旧制の佐世保中学校、旧制佐世保第二中学校、旧制東和中学校、旧制佐世保高等女学校、旧制成徳高等女学校の五校を統合し、県立佐世保北高と県立佐世保南高の新しい学校を創立、教師はそれぞれ両校に配分、生徒は地域制によって玉屋あたりを境として、南北に振り分けられるのが原則であったが、実際は各人種々の思惑から、互いに越境通学する者がいたのでその境は必ずしも明確ではない。

北高の校舎となった成徳高女の校舎には、なお戦争中の黒い防空迷彩が施されていた。当初は、旧校長三人が在職されており、第一回の卒業式では、誰が式辞を述べられたか記憶にないが、女子生徒のソプラノの『蛍の光』の歌声には閉口した事を記憶している。

我々第二回生が北高に在籍したのはわずか一年三月に過ぎず、卒業生といっても校歌さえ満足には歌えない有り様である。

瀬野 清一郎

花の三期生

異性間に真の友情はあるか！

やや哲学論争風に気負い立つ。

O君の主張は『ある』だった。

デリカシーの割には蛮力な身

なり、服も帽子も窮屈そうな、大

柄のO君。

誰もが衣服を新調できるほど豊かな時代ではない。

高三の夏、朝鮮動乱が始まったが、

国中がグロテスクな特需ブームに

沸くのは、まだ先の話になる。

貧しくても心には、はなやぎがあ

った。急な男女共学にとまどうざ

わめきと、エポックメイキングな

時代の開放感ともいえた。

その秋、茶道部の女生徒に招かれ

たというO君は、お礼に映画の券

を渡してきたと話した。

人気洋画は当時学校宛の割当制で、

彼としてもやっと入手したはずの

ものだ。

数日後北高の坂道で、ぱらつき程

度の雨の中をゆつくりと相合傘で

下校するO君を目撃した。

薄紅色の模様が目にしみた。

ふつう相合傘となると、土手側を

足早に下っていくのだが……。右手

のグラウンドではラグビー部員の声

がこだましていた。

土手には野菊が見られた。

嗅ぐと、かすかだが香りもあった。

自分も、相合傘で下校する日があ

ったらそのときは、相手の胸のポ

ケットにさしてあげよう……。

英語の時間、教科書からはみ出し

て、花ことばの解説を受けたりし

た。ばらは愛、菊は真実……といっ

たぐあいだ。そして先生は、自分

で自由につくつてもいいのだとつ

けたした。

卒業も迫り、作る花言葉は、殆ど

『別れ』となつてしまった。

やがて皆はなればなれとなり、あ

れよあれよと現在六十なかば。だ

れいとうなく頭に花をつけて花の

三期生会とよび、年に一度は、関

東地区でも再会をかきねている。

O君こと大島幹敏君は、全体のま

とめ役として北星会初代会長もつ

とめた。病に倒れて今は亡いが、

彼こそ在学中から、花を手にした

幅広い友情の実践者だった。花の

三期生総会出席のため、久しぶり

に帰省した折り、大島君のあの太

胆な相合傘姿が懐かしく胸にこみ

あげてきた。

土手には、もう野菊はなかった。

黒田 隆

努頑触斗会(どがんしゅどかい)

北高に中学校があったことを知っ

ている人は少ないでしょう。

四回生は学制改革により旧制最後

の学年となり、旧制中学三年生の

三学期からは新制中学三年生とし

て、今まで別の学校であった五つ

の学校の男女が一緒になり、北高

併設中学校として同じ校舎で三ヶ

月間学んだという貴重な体験をし

た学年です。北高一年生に最初に

入学した学年でもあります。

中学・高校と三年三ヶ月を北高で

過ごした我々も、月日の経つのは

早いもので、すでに還暦を過ぎて

高齢者の仲間入りに近づいて来た

年代になっています。

同期の集まりは四年に一回程度で

したが、還暦旅行をした機会に、

東京近郊に在住する四回生と還暦

旅行に参加した同期生を会員にし

た、努頑触斗会(どがんしゅどかい)

という会の名称をつけて、

健康に留意し、有意義な人生を過

ごそうと、さらに会員の交流を深

め、親睦を図っています。

旅行幹事を決めて、年間の行事を

計画し、実行しています。特に、

一年に一回は必ず宿泊旅行をする

ことにしており、この旅行はみん

なが期待しているので、納得でき

る旅行を實行しないと、任期が来

ても次期幹事を指名できず、幹事

を継続することになっていきます。

年会費の納入は順調で、運営資金

も確保でき、会も活発な活動がで

きるようになりました。

慶弔規定を設けていますが、この

努頑触斗会に入っているメンバー

は皆さん元気で、幸運にも会費足

から今日まで弔慰金の対象になる

人は一人もいないという状況で、

この会員であることが健康の源に

なっているのではないのでしょうか。

今後、この状態が長く続くこと

を願っています。

平成九年からは、配偶者も対象に

慶弔金を出すことに決めました。

結婚は、年齢に関係なく喜ばしい

ことであり、独身者の結婚が実現

した時にはお祝い金を出すように

決めています。まだ該当者は出

ていません。早く結婚する人がい

て、祝い金を受け取ってほしいと

期待しています。

これから、集まる機会を作り、

大いに、人生を楽しみましょう。

生山 康夫

『俳句』に魅せられて

還暦も過ぎたある晩、日本橋の小料理屋で久し振りに野見山昭彦君と飲んだ。

一献傾けながら『もし暇になったら何をするか』という話になり、彼は『昔俳句をやった事があるの、それをやりたい』と言った。なかなか良い趣味だと感じながら中西敏君の事を思い出していた。

彼の俳句歴はすでに十年を越えて、名句を拝見した事もあるが、『面白いからやってみないか』と勧められていた。

何日か過ぎた早春のある日、敬愛する作家司馬遼太郎が亡くなった。こよなく愛したという菜の花一色に包まれた葬儀の模様を、TVは報じていた。

感動的なその映像を見ている内に、ふと出てきたのが

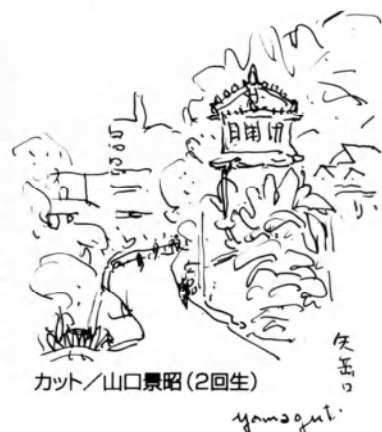
菜の花に

うずもれて逝く

遼太郎

『遅まきながらやってみようか』気持ち揺れ動いた。

そしてまず歳時記を買い求め、熱が冷めない内にと、芭蕉、蕪村、子規、虚子などの句集や、秋桜子、風生、などの解説書を次々と読み漁った。



カット／山口景昭(2回生)

その春、南里克良君達有志と宮崎でゴルフの機会に恵まれた。

思いがけず歳時記持参で南国吟行の旅となり、プラスアルファの誠に楽しいツアーであった。

爾来一年半が過ぎ、俳句手帳も増えた。

若し生活に色彩があるとするなら、俳句も又同じである。

目や心に映る景色を、十七文字に託し平成九年の夏も、幾つかの風景を残して過ぎ去ろうとしている。

山里の午後の鶏鳴柿青し

あどけなき願ひ叶えよ天の川

美しき故にかなしき遠花火

夏十和田何を秘するか湖青し

奥入瀬に晩夏そろりと忍び寄り

天地は静大にして有情である。

これからも新しい句を詠み続けていきたい。心の趣くままに…

川島勉

苦もあり楽もありて

私達六期生が東京で初めて会合をもったのは昭和三十五、六年頃新宿の『牛や』に十四、五人位集まったでしょうか…。

以来四十年近く途切れる事無く、毎回五十人近くが集まっています。『国民学校』入学の年に戦争勃発。『欲しがりません、勝つまでは』と耐える事を強いられ昭和二十年六月の大空襲で佐世保の街も廃墟と化しました。

終戦後は遠くの学校に間借りしての二部授業、一クラス六十五名という教室で、教科書のあちこちを先生の指示通りに墨で消した記憶は、ずっと心に引っ掛っています。

戦後の混乱期に新制中学校から新制高校へ入学、その後の歳月も含めて同じ時代を生きて来た事は、多くを語らずとも通じ合う何かがあるような気がします。

所で、北高時代を思い返すと、放課後は殆ど新聞部の部室で、タブロイド版四頁を埋めるのに四苦八苦していました。当時部員は七、八名。それまで編集に携わってきた三年生が受験勉強のために退き戦力不足は否めません。

それでも何とか原稿を集め、割付をして印刷所に渡した時の解放感、

初校が刷り上がった時の嬉しきは格別でした。

辛かったのは広告とり。浜田町から上京町にいたる本通りを一軒一軒、お願いして歩きました。

育文堂書店、西沢洋品店、高田薬局、松月堂、玉屋に親和銀行等、よく協力して下さいました。

その大切な広告収入の一割分を食金不能と偽って『チャンポンを食べに行こう』と誰かが言い出し、市役所裏の『かどや』へ…。すぐに顧問の先生にばれ、大目玉をくいました。

こうした悪事は後にも先にも一回きりだった事を申し添えます。還暦を過ぎた今、周辺必ずしも明るい話題ばかりではありません。それだけに友達の大切さと有難さを感じます。

絆により深める北星会の存在は大きく、これまで育てられた役員の方々のご苦労に感謝し、お礼を申し上げます。

深川 秀子



カット／山口英昭(6回生)

仰げば尊し我が師の恩

佐世保北高を卒業して四十三年、七回生も六十一歳、定年で仕事を離れた人、まだまだ現役で頑張っている人もいます。

私は卒業と同時に当時集団就職の草分けとして七人の仲間と共に故郷を後にして上京しました。以来四十三年、寝具卸業の仕事をしています。

卒業と同時に書きましたが卒業式一カ月前、佐世保駅で大勢の人に見送られて出発したので卒業式に出席していません。

私は、市内の中学でなく西彼杵郡西海町出身、当時北高入試は難関で二、三人しか入学出来ず、幸運にも合格した事を、今でも良かったと思っています。

在学中の思い出は、やはり先生との触れ合いです。

一年は外尾先生『人生六分の俠氣四分の熱』と、旧制高校の寮歌を数多く教えていただきました。

佐世保工業に転勤後も上京なさった時はお会いしたものでした。

二年は栗山先生、余り年が離れていなかったで、兄貴分のような気分、先生が上京の折りは浅草、六本木等で酒を飲み交わしました。三年は伊藤先生、受験勉強を必要

としないクラスで、種々ご苦労が多かった事と思います。

佐世保の仲間は今でも先生の命日に集まり『むつごろう会』を結成、偲ぶ会を開いています。

伊藤先生は『本を手放すな、頭を明晰にする事が若さを保つ秘訣だ』と常々おっしゃっていました。

七回から十四回まで数多くの人が東京就職で上京しましたが、殆ど竹末先生のお世話になりました。

東京の親代わりが先生のお兄さん椎葉二様で、小生の結婚の時は仲人をして下さいました。

栄岩校長先生は、退職後もいつも年賀状を下さり、就職組の事を大変心配なさっていました。

江頭先生には簿記を教わり、検定簿記三級合格、役立ちました。多感な年頃に北高で学べた事は、今でも誇りに思っています。

上京直後、将来について悩んでいた時、同級の友人からの手紙にあった『ふるさと』の歌の一節、『志を果して、いつの日にか還らん、山は碧き故郷、水は清き故郷』

今でも忘れる事は出来ません。

太田 英男

会費四〇〇円から始まった関東北八会

会費四〇〇円（女性三〇〇円）という案内状で、八回生の同期会は始まりました。卒業した翌年の昭和三十三年六月でした。桁違いかと思われるような会費ですが、集団就職一年目または学生で仕送りを受けている者が殆どで、決して安い額でなかったように思います。当初は有志が声を掛け合い、ガリ版を使って案内状を作成したりしましたが、何某方、寮、アパートなど住所の変動も多く、マンションという宛先はなかったようです。参加者も三十名位でしたが殆ど男性で、当時の佐世保との距離感の大きさもあつたせいか、随分意気盛んに盛り上がっていました。

十回目頃（会費三千円位）から幹事を選出して、その幹事が翌年の幹事を指名するという、現在の方式になりました。

二十回目頃（会費六千円位）から女性の参加も多くなり、一次会のメンバーが殆ど二次会にも参加するようにになりました。また、名古屋、関西方面からの常連も多くなり、二次会の会場、費用等を考慮すると宿泊付きにした方が良くとの意見が出てきて、アンケートを取ったりしました。

女性の参加が激減するのではないかと心配しながらも、三十回目に湯河原の旅館で初めての宿泊付きの会を行いました。結果は予想に反して女性の参加も多く、ほぼ男女同数で、総数でも従来と変わらない位でした。中年になってきたせいか、温泉付きが好評のため、その後近郊を利用した宿泊セット方式が続いていますが、中には宿泊には参加出来ないという人もあり、そういう人のためには一昨年前の幹事が実施した、都内のホテルを利用した会で、一次会のみに参加も出来るという方法も、数年に一度実施した方がいと思います。

中里 徹也



カット/畑農照雄(5回生)

九回生便り

故郷「佐世保」を離れて四十年が経とうとしている。佐世保で暮らした十七年の倍以上の年月を異郷で暮らした事となる。

米軍基地の街として狂瀝と繁栄の中で多感な高校生活を送った。高校時代が一番懐かしく輝いていた様に思えるのは年を取った証拠かもしれない。

第二校友歌だったと思うが「北の都に秋たけて、我ら二十の夢数う、男女の住む国に、二八に還る術もなし」と歌った様に、あの頃の十六歳には何としても還れない。薄くなった頭や顔の皺、丸くなった背、身体的な衰えは隠しようもないが、気持ちだけはあの頃に還れる時がある。

毎年十一月に招集される同窓会の席では皆が十六歳の紅顔の美少年少女に還っている。

故郷の訛り丸出しでの「どがんによった!」「なんば言いよつか」を聞くともう高校三年生である。疎遠になった友の消息、お世話になった教師の安否を問い、お互いの消息を喜び合う。

酒が周り、近況報告も一渡り落ち着くと行き着く話題は高校での事となる。

「カンペば見つかつてガラレタもんね!」「ガラレタ」何と懐かしい響きである事か!

近頃は叱られる事もなくなりまして。誰かに叱られたい気がします。そんな東京近辺在住の九回生の集まりも、もう二十回を数える事となりました。

年齢六十を逆にした十六に還りたい人は、出席をお待ちしております。

詳細は「相原」まで問い合わせ下さい。

高木久雄



カット/山口景昭(2回生)

二つのビッグ・バン

最初に、東京北星会二十周年を祝し、同時に歴代の幹事の皆様に感謝の意を表したいと思います。

さて、我が日本国は大変革期に入りつつある。同様に我が十回生も人生の変革期、つまり人生いかに生きるかのビッグ・バンを迎えつつある。周知の通り、ビッグ・バンとは、宇宙とか大きな星が大爆発を起こして新しい世界を創造することであり、近くは十年前に英国で実施された証券界の大改革の時に使われた言葉である。

振り返ってみると、日本国は戦後五十年間欧米諸国を刮目させるに充分な大発展を遂げた。そして、最近数年間は「制度疲労症候群」を呈し、その克服策として政治・行政・財政・教育・金融などあらゆる分野でビッグ・バンの実務が急がれている。同様に我が十回生も、日本経済発展の渦中で働き蜂として貢献した。そして、ぼつぼつ「肉体疲労症候群」を呈しはじめている。人生八十年に向けて、欧米流の人生を楽しむ方向へギア・チェンジの必要がある。

我が十回生の定期会食は、今では二十人ぐらいの規模になり、隔月に開催されている。ゴルフ会もある。二十年くらい前だったか、二人三人の偶然の出会いに端を発し、自然に輪が広がっていった。東京北星会十回生の幹事もスムーズに決まっていた。初代が森山君。夫婦揃って北高同期卒とあって、面倒見の良いこと、それは最高であった。彼が転勤して、二代目が山口君。仲間から半ば強制的にかつぎだされたせいとか、ぶつぶつ文句を言うのは大目に見ざるを得ない。十数年に亘り、サブ幹事の土山君と共に責務を充分果たしている。そのうち、長崎放送に勤める永友君が東京に転勤してきた。本命到来で、彼が定期会食会の実質的幹事を引き受けた。今では、会食の場所も、同社のビル内にある「吉宗」で定着しつつある。このほか、強力な助っ人もいる。猪須嬢は自分が経営する新宿の「ミミ」を我が十回生のために赤字覚悟で開放してくれている。共有体験をもつ人間同士の集まりはとにかく楽しい。新人は大歓迎!

熟年の「ビッグ・バン」も二十一世紀も佐世保弁の渦で乗り切ろう! 水谷 千伍

11回卒業生のみなさん!お元気ですか!
関東の同期会も元気です。平成9年6月28日の元気印しです。



増田 赤坂(富田) 山口 中山 野崎 猪原 今里 団 池田 野口 石橋 石橋 中里 大春
平井 木下 池田 松本 福田 伊澤 山口 矢野 蒲浦 落合 小泉
(吉川) (松永) (布江) (小林) (井上) (坂田) (本田) (吉田) (原) (野島) (白井)
向 古川 菅原 田吉 後藤 川原田 川崎 太田

十二回生同期会回顧録

今年で関東地区同期会は三十年目を迎えます。継続は力なり幹事の君は大変苦労したことと思います。ここに三十年を振り返って幹事の君に感謝の意を表したいと思ひます。又三十年の活動状況から見ても三時期に分けられそれぞれの時期の想い出を記したいと思ひます。

《創成期》(昭和四十二年～五十年) 三人の麻雀仲間(中村、加藤古賀)が「東京にいる同級生を集めてみようや」と言う事から始まり、男性ばかり十八名、二十五名が出席、同期会というより夜の巷をさまよふのが目的だったようです?又女性軍は子育てに忙しい時期だったようで出席も難しい状況の時代でした。

《苦難の時期》(昭和五十一年～六十二年) 女性軍が出席するようになり出席人数も二十五名、四十名に増加しましたが会場探し、出席人数の確認等で大変苦労が多かったようです。毎年同期会開催月が近くなると「今年は中止にしようか」とこの時期毎年思ったそうです。男性は特に職場においても働き盛り重要な仕事を任せられ又転勤も多くスケジュール調整が難しく開催時期間近まで電話連絡が大変

だったようです。

《円熟期》(昭和六十二年～平成九年) 出席人数も五十名、六十名近くまでふくれあがり開催会場は毎年二次会も楽しく行える場所を探し、又出席者は北は北海道から南は九州まで日本各地から関東地区同期会に集まるようになりました。毎年開催しても出席人数は減る事もなく関東地区同期会を大いに楽しむために出席するようになりました。

毎年開催しているにも関わらず毎回話も尽きず夜を徹して語り合うことが常となり正に仕事のことも家庭のことも一時わすれ佐世保北高の良き青春時代を語りあう同期会の円熟期にはいっていると思われまふ。

我々十二回生の夢は近い将来関東地区同期会で百名以上を出席させることです。この人数は同期卒業生の約二十五%にあたりまふ。

十二回生関東地区同期会が益々円熟することにより、東京北星会の発展に少しでも貢献出来ればと考えます。最後に同期会毎回連続出席の加藤君、中村君ご苦労様同期会が消滅するまで継続して下さい。次は《完成期》目指して頑張ろう。川崎敏明

十三回生、東京物語

当時の日本は高度成長へと向かっていた。佐世保駅での哀愁列車・急行「西海」号の涙の別れから三十七年が夢の如く過ぎ、定年を間近にした五十五歳になった。

今では百名近い「不確定」同期生が関東地区に在住しているようだ。不定期に開く宴には座席がなくなる程になった。昭和四十三年に始めた最初のクラス会から三十年が過ぎ、孫を持つ人も出てきた。

当時、東京での同期の友は数人だったが口コミで十三回生の「東京孤児」が次々に判明したのは、古川忠男君の協力が大きかった。

東京北星会総会への出席者数では第二回から上位を独走してきたが、最近の後輩の勢いに押されがちになつてはいるものの、まだまだ恥ずかしくない数は堅持している。

同期生の間には無言の約束があり、宴席での喧嘩、トラブルが一度もないことは大きな誇りだ。みんなが高校時代に戻り、お互いが愛称で呼び合い、馬鹿な話と冗談は言っても、仕事の話と各々の台所と財布を覗かないことを礼儀として弁えている。時々佐世保から恩師友達が上京してくるが、その都度臨時宴会になる。御厨、浜中君が

連絡役を務めてくれている。古川岩永、赤瀬、樋口、渡辺、坂井、酒見、宮下、御厨、船津、浜中、前田君は皆勤賞だ。

私が主任幹事を三十年間務めてきたが、平成三年十月に「脳梗塞」で倒れ治療に専念したため、第六回総会からは古川、御厨、酒見、岩永、浜中君がフォローしてくれた。おかげで今はすっかり回復し、その真心には心底感謝している。宴開催の度に全員出席を期待して必ず連絡するのだが、理由のない欠席の返信にはいつもがっかりさせられる。名古屋の中山雅人、大阪の五考（法師山）君の毎回出席には頭が下がる。本拠佐世保では藤井剛君が会長で、五年周期に恩師を招いて開いている。福岡地区は、浅田勲君が連絡会長役を務めている。関西・東海地区は杉野彰典、中山雅人、山口聖治君が連絡幹事になり、合同で毎年大阪か名古屋の何れかで開催している。同期生の中には若くして他界した人もいる。杖をつく歳になつても笑顔を忘れず、佐世保を涙で後にしたみんなが末永く元気で、健康で、家庭円満で、楽しい酒を酌み交わせる仲間であり続けることを願って止まない。

浜副洋三

佐世保北高 第14期生

(昭和37年卒)

同期会は、毎年3回以上行われ、参加者は関東近辺の人達だけでなく、全国から30名(男女半数位)近くの人達が出席し、盛大に行われています。是非、皆様の参加をお待ちしています。

〈一年間の定例懇親会〉

- 新年会(1月)
- 懇親会(5月)
(隔年で北星会の同窓会)
- 秋の親睦旅行(10月)
(一泊二日)
- ゴルフ会(適宜)



▲秋の一泊親睦旅行会(益子にて)

集、合、



〈連絡先〉 山中 邦彦

楽しき哉！東京三八（サンパチ）会

我々十五回生はケネディ暗殺の年の春母校を巣立った。光陰矢の如し！爾来今年で丁度三十五年。往時の紅顔の美少年と花も恥じらう乙女達も今や孫の話が話題に上る年頃と相成った。まさに「三八に

ならぬそして場違いの佐世保弁混じりの声高な談笑と高歌放吟が現出するのである。

帰る術もなし」嗚呼（詠嘆）！現在首都圏在住（出稼ぎ）の同期生は七十五名（男四十七名、女二十八名）、皆一家の大黒柱や主婦として活躍中である。当同期会は卒業年に因んで「東京三八（サンパチ）会」の名称で活動している。以前は女性中心の小ぢんまりとした活動だったが、六年前の野郎共の大量入会以来俄かに股賑を極める様になり、毎年忘年会等二〜三回集まって、懇親を深めている。全員集合は難しいが、二十五〜三十名が集い、ワイワイガヤガヤ大いに食べて飲んで喋って、ノッて来た所で二次会へが基本パターン。二次会では歌ってヤジッて踊ってシヤベッて夜の更けるのを忘れる程である。とに角当日は、近況報告や懐旧談に始まって次第に盛り上がり、二次会の頃には中学・高校時代にタイムスリップ（退行現象？イヤ童心に帰って）する者が続出し、深夜の都心の盛り場に時

会員数は転勤・転居等による減少は避けられぬが、その分を新規会員の発見によりカバーしほゞ横這いで推移している。又会員間の情報ネットワークの一助として、ナント機関紙「三八かわら版」迄発行しているのである（拍手）。今後はインターネット利用も考慮中（？）とか。当地域には未判明の同期生がもつというと思われるので引続き探索活動に力を入れ、更なる発展を図って行きたい。

全国の同期生&同窓生で十五回生の情報がありましたら、事務局（江頭、瀬戸口、中谷（長山）迄ご連絡下さい。（薄謝進呈）

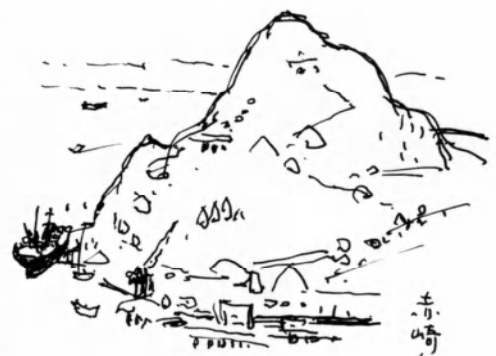
賑やかで楽しい三八会だが、今後は時には趣向を変えて、観劇等のカルチャー面やゴルフ、ボーリング等のスポーツ面にも新機軸を求めて行きたい（ホッネは老後のボケ防止の為だろうテカ？・ピンポン）。マ、とにかく全国の同期生の仲間達、今後何度も集まれる様元気で長生きシヨウ！

上京の折はご一報を。
江頭忠政

東京三九会・全員集合

我々十六回生は、東京北星会に於いてほとんど影の薄い存在ですが、北高三十九年卒業の「三九会」として地元佐世保をはじめ、全国的に名を馳せております。

東京三九会では一〜二ヶ月毎の例会と、年一度の総会、二年毎の「大人の修学旅行」などに多彩な活動を続けております。これも偏に会員同志の低レベルでの友情と、何でも遠慮なく話せる開放的な雰囲気、皆を集合させる要因かと思われまふ。会の発足から十数年を経た今でも、故郷佐世保での青春の頃を語り合い、ストレス発散の



カット／山口景昭（2回生）

場として延々十時間にも及ぶことも度々です。

又現在の社会的地位や家族関係等を主たる話題にしない事も会が継続できているもう一つの要因かも知れません。

我々の人生もそろそろ先が見えてきました。酒や食事がうまいと感じる、三九会へ出席してみても如何ですか？素晴らしい二度目の青春が貴方をまっています。

尚、この度、素晴らしい三九会の【会旗】が出来上がりました。慶弔の折是非ご利用ください。

連絡先・佐世保三九会

会長 古川泰博

島中 勝

あれから、早三十年わが青春はさせば

平成七年十二月十二日年末のあわただしいなか、佐世保北高十七回生卒業三十周年記念同窓会を開催しました。

長崎市より有川幸利先生をゲストに佐世保、関西からを含め総勢四十六名のなつかしい面々が大集合！昭和三十八年～四十年学生時代のヒット曲をBGMに久方ぶりに近況を語り合う心温まる時間を過ごすことが出来ました。

夕陽に染まる九十九島の美しい風景を今でも忘れることなく、青春を佐世保で過ごしたご同輩又あったかー！

坂本廉三

【十七回生連絡先】



カット／高祖一幸（4回生）

次に、向かって！

平成九年に卒業満三十年を迎えた。佐世保、長崎、福岡、大阪、そして東京に地区事務局を置き各地区持ち回りで開催してきた全国同期会も一昨年の東京で一巡し、昨年の佐世保での三十年記念同期会をもって一応の区切りがついた。

毎回百名を超える同期生が全国から駆けつけ、それこそ夜を徹して歓談しては大いに満足し、次回の再会を固く誓い合って夫々の居場所へと帰って行ったものだ。

さて次回からはどうしよう、結論はまだ出ていない。勿論地区内では会う機会は度々あるが、全国規模となるとおそらく五年毎の区切りの年々でのこととなるであろう。それではあと何回参加できるかな？「健康でありさえすれば、限りなく参加するさ。」みんなに共通した認識であろう。

東京地区の同期会は毎年五月もしくは六月、総会がある年には二次会として開催しており、三十名から五十名が参加している。

東京地区は愛知・岐阜県以東関東までの百二十数名を名簿上で把握していて、案内状は返信の有無に関わらず毎回発送しつづけている。これは大変な労力である。しかし

最新の住所を把握する上では最良の方法である。また何かしら近況等が書き添えてあれば、これを読むのが実に楽しいものだ。

子年生まれば、愈々五十歳に手が届いた。細かな字を読む際には、老眼鏡が手放せなくなった。それでいて平成八年秋から始まった電子メールの輪が急速に広がっている。メインステーションに送信すると、全員に一斉に配信するシステムも確立している。それこそ「佐世保弁」が西へ東へと飛び交っている。更にホームページも開設しており、卒業時にはあるが写真付き名簿、各地区と佐世保の情報等を掲載している。

アドレスは次のとおりである。

・north@listsar.miyazaki-med.ac.jp

http://as.miyazaki-med.ac.jp/north/

なお、東京地区の事務局は井手善敏君が務めてくれている。

【連絡先】

何かにつけ区切りをつけることを迫られている世代ではあるが、次に向かつてまた前進。

久保誠

不思議、不思議の北高

今年もまた年に一度の紫集会が近づいてきました。私たち第二十回卒業生がこの東京に集まるようになって早十回目。なんとなくメンバーは決まってきたものの、ひょっこり顔を出す珍しい人、遠く関西から来てくれる人、転勤で私たちの仲間入りをした人と、年に一度の楽しみは続いています。

三十年以上も前の高校時代。何と私の人生の中で一番何もしなかった三年間。部活もせず、勉強もせず、遊びもせず(?)の、人生の汚点(?)と想っていた三年間で、す。なのに、時を経てみますと、この三年間が、いつも忙しく突っ走っている私に色々な事を気付かせてくれ、思いがけずも今の私がいるような気がしてなりません。

あーとても不思議。
それに年に一度の紫集会で仲間たちと会い、たわいない語らいをし、近況を話し、聞き、そうする事がとても心なごみ、どうってことないのに楽しく、また来年も会えればいいなという思いで、煩雑な生活の中にふと何らかの影響を与えてくれるような気がします。これもまた不思議。
そう、同期生だけではないのです。

心なごませてくれる不思議は。ここ数年で私のまわりに北高の先輩や後輩がいました。子供の小学校の先生がひとり。とても熱心な知的な女性。たぶん二つ後輩。嬉しいじゃないですか。みんな頑張っているなっておもいました。

次に子供の中学校にひとり。これがなんと副校長先生。ある会合でPTAの仲間が私の事を呼びました。「佐世保北高のマドンナ」と。

(過大な評価ですが。)すると副校長が「佐世保北高生は誰ね」ですって。驚きました。四つ先輩ですって。さらにもうひとり。「私も佐世保北高です」「えっもうひとり北高のマドンナがいるよ」四つ後輩ですって。一年近く共にPTAで頑張っていた仲間です。本当に嬉しいじゃないですか。みんな頑張っているのです。それに、四つ先輩の副校長先生にはすっかりお世話になりました。他校に転出なさったあと、子供のバスケット部の難問を色々アドバイスしていただき、かげでとてもお力添えを頂きました。これも先輩だからと気軽に相談出来たおかげです。不思議、不思議の佐世保北高。

これからもどうってことないのに、どうってことあるのでしょうか。

小河 令子

幹事からのメッセージ

われわれの母校である長崎県立佐世保北高等学校が創立五十周年目、また、東京北星会が発足二十周年を迎えるにあたり、卒業生としてまた東京北星会の一員として、感慨無量の感が致します。

振り替えば、昭和四十四年三月卒業以来、早くも二十一年の歳月が経過しようとしておりますが、我々二十一回卒業生の皆様におかれましては、それぞれの地域、立場でご活躍のことと推察致しております。

この節目の年を機に、今まで交流の乏しかった我々二十一回生も、より一層、相互の情報交換を行い、連絡を密にし連帯を深め、懐かしい思い出話などをお互いゆっくり語り合えるような機会を持つ事ができるように努力していきたいと存じますので、何卒ご協力頂戴たくお願い致します。

なお、首都圏にお住まいの皆様方には、非力ではありますが、不肖この私が東京北星会の幹事を承っておりますので、お知り合いの方にお声を掛けて頂き、同級生の近況等をお知らせ頂ければ、幸甚に存じます。

また、佐世保の同期会(代表世話

人は、六組の岡崎公一氏と四組の岡井正明氏(中心)と福岡北星会(幹事は十組の朝長一敏氏)から、平成十年八月十四日に佐世保で三十周年記念の同期会開催を計画しているの、東京方面在住の皆様も是非ご参集いただきたい、との連絡を受けております。小生も出席を予定しておりますので、八月帰省予定の方は、日程調整の上、ご参加下さるようお願いいたします。さて、四十代の後半ともなりま

と、今までただひたすら前進してきた各自の人生にも一服し、束の間でも、過ぎ去りし己の軌跡を顧みたくなるものです。そのような時こそ、東京北星会の幹事として役立って参りたいと思っております。二十一回生皆様方の暖かいご支援とご協力を、重ねてお願い申し上げます。

最後になりましたが「北高」のますますのご発展と、卒業生各位のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

吉武 大志



カット／畑農照雄(5回生)

同期の集まりの強化を願って

私たち二十二回生が北高に入学した年は、米空母エンタープライズが初めて佐世保に寄港した年でしたので、もう三十年も前のことになりました。当然のことながら、皆それぞれの歳になってしまいましたが、

東京周辺に在住する我が同期生は、揺り籠から墓場までとは行きませんが、実に多彩な分野で活躍しています。そして、何かあればいつでも相談できる色々の分野で活躍している友人たちの存在は、とても心強いものです。

同期の集まりとしては、これまでいくつかのグループでは、それぞれよく集まったり一緒に遊んだりして来ているようですが、同期全体での活動というものは、決して盛んではありませんでした。これからは、今回の総会のような機会をとらえながら、同期全体の活動も強めていけたらと願っています。会社等に勤めている人も、前に比べると転勤はずつと少なくなってきたようですし、女性の方も子育てが終わりかけて来た人も多くなっているようです。これまでより一層まとまった同窓会の活動が可能状況が生まれてきているので

はないかと思っています。

さしあたっては、少人数でもいいのでゴルフコンペからでも始められないかと考えています。特別な方法はないでしょうから、ボチボチと、少しずつでも時間を割きつつ、まめにやってみようと思います。一桁の先輩たちの団結力にはかなうべくもありませんが、先を見ながら行きたいと思っています。

宮田 学



カット/山口景昭(2回生)

中年パワーを爆発させましょう！
二十四回生の仲間たちへ

我々が北高に入学したS四十四年は、学生運動が東大安田講堂闘争でピークを迎え、高校にも学園紛争が飛び火していた頃であった。北高でも「バリケード封鎖」「卒業式乱入事件」と全国に名を轟かせる事件が続き、否応なしに政治に目を向けさせられた。そんな中で起こったS四十五年十一月の三島由紀夫割腹自決には大きな衝撃を受けたものだった。

また、日本経済は高度経済成長の真っ只中にあり、GNPが世界第二位に躍り出たと言われた頃、それを象徴するような大阪万博が開かれた。お陰で二年生の時に修学旅行を経験することができ、各国・企業のパビリオンに目を見張り、豊かな未来の到来を実感したものだ。音楽の世界ではビートルズが解散し、一つの時代が終わった頃、日本ではフォークソングが支持され「戦争を知らない子供たち」「あの素晴らしい愛をもう一度」など良い曲がたくさん作られ、深夜放送に聞き入っていたものだ。高校を卒業して四半世紀が過ぎ、とうに不惑を超えた今も、あの三

年間は鮮明な思い出として心の中で存在感を持っている。今いる自分の原点がそこにあると主張している。

政治について論じ合い、人生・愛について語り合う中で、自分を見つめ進むべき方向を見つけようとしたあの頃。そして、それが見つかるうと見つかるまいと否応なしに、人生最初の進路を選択することになった。その後の結果がどうあれ、高校の卒業が全ての出発点であった。

仕事で責任が増し、家庭でも子供との距離が難しくなってきたこの頃、人生の充実感を感じる一方で、ふと、あの特別の選択がなかったかとおもうことがある。ないと分かっている、別の生き方への憧れと表現したらよいのか、そういう感情に襲われたことがある。

そういう時に、あの三年間を同じく生きた仲間たちに無性に会いたくなる。会って自分を確かめたいのかも知れない。会うとたちまち二十五年前にタイムスリップし居心地のよい気分になる。そんな時間がたまには必要なのかもしれないと、近頃思う。

武藤 正典

不惑を過ぎて

北高が創立五十周年という事は、我々の年が丁度その真ん中にある訳であり、「光陰矢のごとし」とはいえ在学時の事がはるか昔に思われ、感慨もひとしおである。

思えば私が東京北星会の幹事として最初に関わってから、はや十五年が、経過している。一時期転勤で東京を離れた間、山口まゆみさんらが幹事を務めてくれていたが六年前に東京に戻り幹事長に挨拶状を出した途端、即座に電話で呼び出され、再び幹事を引き受けることとなった。

とはいえ、東京北星会の幹事としてはそこそこの務めを果たしてはいるものの、同期のまとめとしては、はなはだ心もとないものがある。時には同期で集まってゴルフコンペを行い、その後五反田の簡易保険ホール（ゆうぽーと）の裏に同期の中村君が開いた「中村」という寿司屋で旧交を温め合っているらしいが、私がゴルフをやらないので参加すらしていない有様である。全く申し訳ないと思っており、なんとか定例的な同期の集まりを企画したいと考えている。もう暫く時間を与えて欲しい。さて、同期にとって嬉しいニュー

スが一つある。在校時代に野球部で活躍していた公文兄弟の健一君が、母校の体育の教師になり、さらに母校出身として初めて野球部の監督に就任したとのこと。甲子園を目指す母校にさらなる声援を送りたい。

東京北星会の関係では、平成八年に、二十四回生幹事の近藤恵一氏に窓口となって頂いて、私の勤務先が保有している横尾忠則氏や、日比野克彦氏の超大作をはじめとするアート作品のオリジナルを、鹿子前に出来た佐世保パールシー・リゾートに無償で無期限貸出を行った。これなどは、東京北星会の活動がなければ実現しなかったもので、一つの成果と言えるよう。佐世保に帰省された時にはぜひ訪ねて、それらの作品群を見て頂きたいと思っている。

ともあれ、そろそろ体もあちこちオーバーホールが必要となりつつある年齢となってきましたが、精一杯頑張るつもりですので、同期のことでなにかしらのことがあれば、ぜひ声を掛けてもらいたいし、近況等もご連絡をお待ちしております。

小川 和彦

都合付けて参加しましょう！

私が東京北星会の幹事になったのが八十六年で、それ以来十二年が経過しました。その間に今回も含めて七回目の総会を迎えることになります。

同期生が集まる機会としては、総会の他に新年会がありますが、新年会は三十人前後集まるのに、総会はいつもひとケタで寂しい思いをしているのが現状です。

実は、新年会も以前はやったりやらなかったり、やっても十人来るかどうかという状態だったので、九十五年から様子が変わりました。というのは、九十四年八月に恒例の卒業二十周年パーティーを佐世保で行った際、佐世保在住の同期生が、ほとんど全ての同期生の住所を調べ上げてくれたおかげで、首都圏在住の同期生が八十人程いることがわかったからです。九十六年一月の新年会は十五人。まだまだ多くはなかったのですが、東京では新記録でした。さらに三月には北川誠一郎君の送別会。佐世保の長崎短期大学に転職することになったので、まだ同期会に出たことがないという彼のために開いたところ、何と三十五人も集まって大幅な記録更新となりました。



カット／畑農照雄（5回生）

おまけに、彼は青い目の可愛い嫁さんを連れてきて、大いに盛り上がった次第です。

珍しく年に二回も開いたと思ったら、今度は杉原浩三君の送別会を六月に開くことになりました。第一勸銀トレーニーとして派遣されていた彼が、任期を終え親和銀行に戻るようになったのです。この時も三十五人が集まり盛会でした。これだけ集まったのは、クラス幹事を決めて連絡を分担したことも一要因です。参加者の顔ぶれは、各々の都合があり、毎回一致するわけではありませんが、首都圏外からの参加者もあります。新年会も総会も、都合さえつければどこからでも参加してもらいたいと思います。佐世保でも、二十周年パーティー以来、クラス会がよく開かれています。

都合さえつければ参加するようにしましょう！

古川 英夫

不惑の年と思ひいふ

まだまだ余裕があると思つていても、この原稿の締め切りのように、すぐに時間が経つてしまふ。まさに、光陰矢のごとしである。

そういう自身も、今年四十歳になつてしまつた。所謂、「不惑」の年であるが、他の人たち、とりわけ私と一緒に昭和五十一年三月に卒業した第二十八回生の方々はどのような心持ちで四十歳と言う節目を迎えているのだろうか。いや、今「節目」と言う言葉を使つたが、本当に節目と思つているのか、それ自体が疑問だ。自分自身を振り返つても、精神的、或いは気持ちの上ではまだまだ三十代のつもりである。少なくとも、自分の父親が四十歳の時よりも、今の自分の方が数段若い（あるいは未熟か）と確信している。

そうは言つても、肉体的にはピークを過ぎて無理が利かなくなつてゐることは、いくら自信過剰の性格でも自覚せざるを得ない。足腰が弱くなつた、疲れが取れない、酒が弱くなつた（これが一番痛い）等など、挙げればきりがながい。一方で、鍛え直せば体力はまた元に戻ると思つてゐるところが、愚かさの極みだ。

実は、四十歳になる前に、トライアスロンのハーフ版（水泳一・五km、自転車四十km、マラソン十km）に挑戦してみようと思ひつき、三十代終わり頃から密かに練習してきたのだが、水泳はどうにかクリア出来るようになったものの、自転車は、目標の半分程度、マラソンに至つては1kmがやっとという状況で、残念ながら、一生の内に達成できるか、いささか心もとなくなつてきた。

しかし、待てよ、二十八回生と言うことは、上には何と二十七歳も年上の先輩がいるのではないか。そして、彼らから見れば私はほんの洩垂れ小僧にしかすぎないのだ。「たかが四十歳になつたぐらゐで」との先輩方のお叱りの声が聞こえてきそうである。

「不惑」の筈が、ふらふらと迷つてばかり。せめて先輩方の頑張りに学ぶことにしよう。

芹沢 貢



『ふつけた事ばっかい言ひなよ...』

「北高」「東京」「二十年」という三つのキーワードは、我々二十九回卒の者にとつても、意味のある言葉である。

そう、我々は「北高」を卒業して、「東京」に出てきて、ちょうど「二十年」になる。その二十年たった同窓生達の、飲んだ席での会話が以下。ふうけた意見が、まあ多い。「今の政治家は、小物ばっかいばい。情けんなか」とは、佐世保の市会議員になれなかつた男の言葉。ただのサラリーマンが、大きい事をおつしやる。

「高校の時、あの男もオイがくらしたもんね」と言うのは、下級生を殴つて謹慎になり、生徒会長を半年で辞めた男の戯れ言。

「成田空港で物流の動きを見てると、世界の動きが見える」と大きく出たのは、某国立大学を半年で辞めた、某大手デパート系運送会社員の男の弁。

だれそれ構わず、「おまえも年収は一千万を超えたやろうね」という、自分が超えた事を徐々にバラス、某財閥系の超優良企業の男。その男に対して「いや、うちのグループは、君のところでもつてるようなもんよ」と言うのは、同

じ財閥系の自動車会社のヤツ。グループ内で勝手に誉めあえ、と思つてしまふのは私だけか？。

「ああ、あの女や、なかなか良かったばい」とは、二十九回卒業生の中で、女に最もモテタ、現在スポーツクラブに勤めている男。

建設的な話はまずなく、回顧的な話は一時間もすれば終わり、スキあらば自慢をしようとする会話は、なんと疲れる事か、と思つていた。

だが、その後でよくよく聞くと、市議會議員になれなかつた男は離婚で大変な目にあい、某国立大学を辞めた男は、国立大学に合格する人数だけで勝負していたその頃の北高のカゲを引きずつていた。

元生徒会長も財閥系の男達も、色男もみんなそれぞれが、色々な事を滑りぬけて生きてきた。そんな男達に向けて、ほそぼそと私は言った。「あんまい、ふうけた事ばっかい言ひなよ...。でもまあ、お互いががんばろうや...。オイ達も、人生の折り返し地点に立つたばい」

我々二十九回卒業生は、上京して二十年。定年退職までに、およそ二十年。

前田 隆敏

東京北星会二十周年に向けて

東京にいと「ふるさと言葉」を使う機会も少なく（一部に意地になって使い続けている方もいらっしゃると思いますが）、佐世保のことを日々の生活の中で思い出すことは少なくなってきました。特に三十路も後半を過ぎた私たちの年代では、高校時代まで生きた時間より、佐世保から離れた時間の方が長くなった。当然とも言えるそんな事実が、あらためて「故郷の距離」を思い知らされた気持ちになります。

九十八年夏は、それでも、台風にもなう土砂崩れの現場として「原分町」が出てきて、心を痛めながらも、インタビューを受ける方の佐世保弁を懐かしく思ったりもしていました。（失礼）さて、私たち北高三十回卒業生は昨年夏、お盆休みを利用して、「卒業二十周年」を祝う会を実施しました。三十回卒といえは昭和五十三年（一九七八年）卒業ですから少々気の早い「二十周年」なのですが、「思いついた時がやる時」ということなのでしょう。とにかくやってみました。会場は京町バス停前の「セントラルホテル」。この支配人が同期の土肥君であり無

理もききます。井上安治、松永宏之、両恩師の出席も頂き、何と約百三十人が出席しました。

会は、開会の挨拶（新良君・丸田君、恩師・同級生のうちの物故者に黙とうを捧げ、アトラクションと続きました。男子（！）は会場の右、女子は左に分かれていた開会当初のヨソヨソしい雰囲気、時間が経つにつれて次第にほぐれ、男女入り乱れての楽しい会になりました。「男はハゲかデブ、女はいい女かおばさん。きれいにふたつにわかれとんねえ」

誰が言ったかこの言葉は、全国共通、時代を超えて「二十年目の同窓会」を言い当てた名言かもしれません。その日の会の後が、「遠い日の火花」に終わったか、「失業園」になったかは、各人各様ありましようが、また、来年もしゅうね」と皆で誓い合ったことには変わりありません。東京からの参加者にとつても、ディーブな佐世保弁に触れられるいい機会でした。「絶対、今度こそ、また、しゅうつと（？）」。

以上、「失業園」できなかった、瀧野隆浩が報告しました。

瀧野 隆浩

青春は決して終わる事はない通り過ぎた季節

昨年、私達三十一回生の名幹事である橋口さんから北星会幹事の話をしていただき、僭越ながら引き受けさせていただいた。五月の総会に向けて年明け早々幹事会の門をくぐった。すると、どうだろう。勝手な思い込みで同年代の方達ばかりだと思っていたものの、集合されている方達の威風堂々たる貫禄ぶり。そこにはまさしく母校の先輩方がずらりと勢ぞろいされていた。私が母校に入学したのは昭和五十一年。その四年前から入学制度が変わり、合同選抜制度が導入された。北高生とは名ばかりの、いわばどんぐりの背くらべ型学生だった訳だ。そのどんぐりの前に輝かしい時代を偲ばせる先輩達のすばらしさといったら、もはや筆舌には尽くしがたい。しかし、そんな小心者の私を先輩方はしごく自然な包容力をもって接して下さった。懐かしい言葉、共通の話題：同じ土地に生まれ同じ学舎で過ごした者同士という安堵感からくる心情な郷愁とでも呼ぶべきか。ちなみに私達の同級生は少なくとも年に一回は必ず集まるようにしている。（それもこれも橋口さんの多大なる尽力の御陰だと深く感謝

している）現在、私達は三十七歳。男性は仕事で多忙を極め、女性の殆どは育児に追われているのが現状だ。昨年五月の総会に出席したのは僅か九名ではあったが、顔触れは毎年変わってきているようでも頼もしい。自身の問題にかまけ故郷や過ぎし日を思い出す暇などとれるものではないだろう。総会に顔を出す度に思う事がある。一つの時代を共有した友のすばらしい成長ぶりを認めた時の自分自身への問い掛け：はたして自分は彼らと比べ、どの程度人間的な成長を果たす事ができただろうか。さらには、未熟だった自分の若い時代への反省。ひいては今はなき時代への郷愁。センチメンタリストと人は笑うだろうか。いや、私は言いたい。かつて某作家は、青春とは通り過ぎればすんでしまう麻疹ではなく、健全な人間ほど自己の青春の中に見出した問題から逃れられないだろう、と述べている。そうだ、青春は過ぎた時代なのではない。永遠に続くのだ。今度は総会でどんな懐かしい友に逢えるだろうか。今からとても楽しみである。

桑島 千秋・足立 慶子

気がつくとき三十八歳

先日、おおよそ五年ぶりに母校を訪ねました。佐世保市役所を横目にいつも登校していた様にゆつくりと坂を登り八幡様にお久し振りですと挨拶し、しばらくするとグラウンドが目に入ってきました。「なつかしかねえ」とおもわず口走り校門に辿り着きました。北高を卒業して今年で十八年、気がつくとき三十八歳。卒業時の倍の年齢になっていました。グラウンドに降りる石の階段に腰かけて當時を振り返ってみましょう。色々な人の顔が浮かんで来ます。学年主任である英語の吉田先生、早朝補習で遅刻すると出席簿の角で叩かれました。今の世の中だったら暴力教師などと罵られるでしょうが、とても温かく且つ厳しく我々に指導してくださいました。数学担当の柴山先生(通称「柴じい」)。いつも穏やかで優しい先生でしたが毎日飛び出すタジャレには閉口しました。個性的な先生が多く、毎日楽しい授業でした。

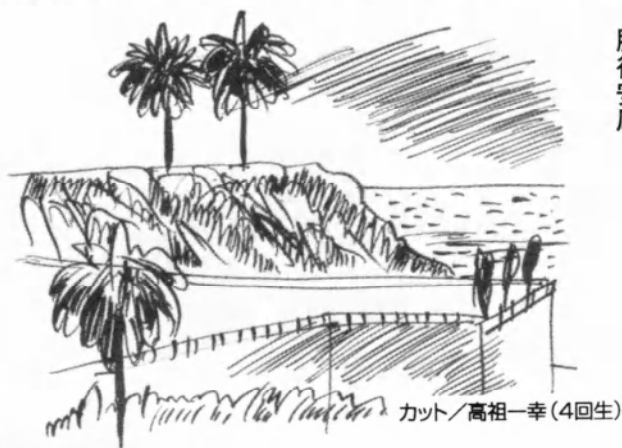
今度は校舎を抜けて、中庭から各倶楽部の部室の方へ行ってみましょう。またまた懐かしい想いにかられます。当時、私はカメラ部に所属していました。「あいしんスポ

ーツ」の長男・金子君、西肥自動車御令嬢・田中千香子さん、小倉君に朝重さん。みんなとても仲がよく楽しい毎日でした。この文章を読んで郷愁にかられた佐世保を離れた卒業生の皆さん、たまには母校(佐世保へ)帰ってこんね。忙しい毎日から解放されてふっと我に返る事ができますよ。

それでは、校歌でも口ずさみながら帰るとしましょう。

「紫匂う烏帽子岳、明けゆく明日空澄みて…」卒業生の皆さん、どうか健康にはくれぐれも気をつけて楽しい人生をおくりましょう。

肥後安広



三十三回の皆様お元気ですか？

ふと振り返ると時の流れは何とも早いもので私達が北高を卒業して十七年の月日が流れてしまいました。年に何度もない事です、同じ街で同じ時を過ごした友が集まり、変わらない佐世保弁で話すのを聞いていると、高校生のままのみんながいる様な、何だか妙にほっとする様な気がするのには私だけでしょうか。北星会に出席するようになってからは同期だけでなく先輩方や後輩達との楽しいひと時も持てるようになりました。(だから東京近辺在住の方は全員幹事になりましょう！)

誰もが様々な場所、人間関係の中で自分の道を歩んでいる事と思いますが、時にはちよつと立ち止まり佐世保に想いを馳せるのでもいい事ではないでしょうか。あの頃の仲間と会って、忘れかけた自分を思い出してみるのもいいものではないでしょうか。

浦田千尋

☆☆☆☆

野球部の先輩の丸田さんに誘われて、幹事会に参加するようになりました。二年に一度の総会を成功させるために、先輩達が早い時期



平成8年、六本木バレンタインで浦田さんのライブで応援の同窓生と

から定期的に幹事会を開き準備されていることに驚きました。それに東京で大勢の人と、佐世保弁で話せるとは思っていませんでした。だから会議が佐世保弁で行われていることに嬉しくなりました。

先輩たちが作ってくれたこのすばらしい会を、存続させ盛り上げていくには、若い人たちの数多くの参加が必要になります。三十三回生を含め、それ以降の後輩たちの積極的な参加を期待します。

太田 誠

三十五期生 電網整備計画!!

三十五回の人間の東京北星会での活動内容だが、なんかやってたっけ?というのが現状である。何か書く材料がないかと、久しぶりに卒業アルバムを開いてもみたが、郷愁は湧くもののこれといって思いつかない。

ここでふと浮かんだのが、インターネットを使った同期の連絡網は作れないか?ということである。卒業して十五年近く経ち、以来地元を遠く離れた東京に住んでいるため自身の高校時代のつながりはないに等しい。同窓会名簿を調べたところ同期の仲間の大半は九州にいるようだけれども、私同様、全国各地に散らばって行った仲間たちも結構いることもわかった。地元にいれば同窓会を開くのも容易だし、昔の仲間たちの情報も伝わりやすいだろう。しかし、連絡の届かない人間は少なくないだろうし、ほうっておけば、年々連絡の困難さは増すことになるだろうから、やるなら今のうちという事情も存在する。具体的には大きく二つの方法がある。

WWで同期のホームページ(H P)を立ち上げ、情報の発信基地とすることである。問題点としては、MLの場合登録者が、百名程度いないと、話題がすぐになくなってしまふ点。WWの場合は掲示板的な要素があるので、ニュースソースの提供ががないと興味を引くようなものが作れない事、一方的な情報提供となりやすいことが挙げられる。どちらの場合にも地元のニュース提供者との連携が不可欠と思われる。利点としては、どちらの場合でも百名以上の規模に個人で管理出来る事であり、すぐにでも始められることである。最大の難点は、同期全員が電子メールのアドレスを持っているわけではないことだが、基幹となり得る連絡網を作るためには最良ではないかと思う。賛同してくれる人がなければ話しにならないけど、この文書が人の目に触れる頃には、私のHPは完成しているの、三十五回HPの仮住まいを作っておきます。後は参加者が増えてくれる事を期待しつつ筆を置きます。

e-mail: sieg@ba2.socnet.ne.jp
竹内 藤雄

高校時代の思い出『幻の甲子園』

高校時代の思い出といえば、僕が二年生(昭和六十年)の時に、夏の甲子園大会の県予選で、我が北高が決勝戦まで進出したことがあった。準決勝戦と決勝戦の応援に大橋球場まで貸し切りバスに乗って行った記憶がある。

あの時は確か、三回戦で佐工とあたり、一対〇の接戦を制して勢いに乗ったのだった。佐工戦は土曜日の午後だったと思うが、北高の勝利を知らせる校内放送が流れた時は、学校に残っていた生徒みんなが沸き上がった。

準決勝戦の長商戦も接戦で、五対四で迎えた最終回は、一打同点のピンチだった。長商最後のバッターが大きなセンターフライを打ち上げた瞬間は、肝を冷やしてしまった。心の中で「ナムサン!」と叫んだのをよく憶えている。

決勝戦は佐実だったが、佐実のエースが準決勝戦で指に怪我をしてしまい、北高との決勝戦には投げられない状態だった。「勝利の女神は北高に味方している」と確信した僕は、決勝戦を通り越して早くも甲子園に思いを馳せていたのだが、甲子園への道程は、そう甘くはなかったのだ。

ゲームの序盤は、接戦だったが、四回くらいから佐実の重量打線を押さえ切れず、終わってみれば大量得点差で大敗した。

試合の終盤は、かなりの得点差が開いてしまったが、北高生の応援は接戦の序盤と同様の大きな声援で、普段の応援練習からは考えられないような一体感だった。そして、グラウンドから出てきた選手たちの目からは、大粒の涙もこぼれていた。甲子園の夢は叶わなかったが、僕の北高時代の忘れ難い思い出となった。選手たちだけでなく、北高生みんなの夏が、一つ終わったのだった。

実は、この原稿を書いている今現在、夏の甲子園大会が終わったばかりである。毎年毎年、県予選の時期になると、やはり我が母校の勝ち負けが気になる。今年は甲子園に行けるかな、やっぱり無理かなど。いつかしらは、甲子園に応援に行ってみたいものである。そしてあわよくば校歌を歌いたい。「我が北高に光りあれ」と。

会満 篤

連絡をお待ちしております

我々四十一回生は、卒業後約十年が経ちますが、活動らしい活動は一度もありません。

今年は、節目の年でもあり、そろそろ活動を始めたいと思います。しかし、現在は、横のつながりもほとんどなく、連絡先もわからない感じです。四十一回生の方、または諸先輩方、後輩の方で四十一回生の消息をご存知の方がいらっしやいましたら、ご一報頂ければ幸いです。

●坂本 和己
四十一回生（平成元年卒業）

●仁位 尚彦



K. Hatano カット／畑農照雄（5回生）

三浦野教会より港をのぞく

校章を 考証する

母校の校章の意味することをご記憶でしょうか？

「北」という文字を三つ合わせ、進歩 向上 反省を表わしています。

学び舎を離れて幾星霜、

翠の黒髪が白くなろうと薄くなろうと、

二八の時を過ぎた若き血潮に

燃えたぎったあの懐かしい時代、

私たちは忘れることができません。

校章の意味することをもう一度想いおこし、

明日へ向かつて大きく

「進歩 向上 反省」して

みようではありませんか！

この校章のデザインは、

母校開校当時の初代美術担当教諭の

松尾一枝先生によるものである。

本誌デザインをはじめ

イラスト・カットを戴いた方々は全て

この松尾先生の

薫陶を受けた教え子たちでもある。

今は亡き先生を偲んで

冒頭に先生の絵を転載させて戴いた。

●松尾一枝先生略歴

昭和二十四年

長崎県立佐世保北高等学校教諭

校章をデザイン

クラブ活動・美術部と演劇部の顧問

平成九年十二月八十六歳にて天寿を尽された。